



TITLE:

新ILLシステムについて

AUTHOR(S):

児玉, 優子

CITATION:

児玉, 優子. 新ILLシステムについて. 静脩 1999, 臨時増刊号(1999)100周年記念: 34-35

ISSUE DATE:

1999-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37858>

RIGHT:

室によっては利用者自身が利用証や図書のバーコードをスキャンして借りるようになっているところもありますが、その場合は個人情報の画面は表示されないように設定してありますのでご安心ください。

このように、iLiswave（富士通の図書館総合システム）のなかでもOPACと並んで利用者に身近な位置にある閲覧システムですが、蔵書点検という機能についてご紹介しましょう。去年の8月、附属図書館では開架図書の一斉点検を実施しました。これは、携帯用の端末4台で開架書架に並んでいる図書を全てスキャンし、登録してある開架図書の所蔵データと照合するというものです。結果は開架図書の約1.5パーセントが不明。不明図書の割合があきらかに高い分野もあり、今後どのように対処すればよいのか頭の痛い問題です。

ところで私は今年の1月に附属図書館から北部構内の基礎物理学研究所図書室に異動になり、カウンターで接する利用者の数やキャラクターという点では大きく変わりました。たとえば附属図書館は学部学生の利用が圧倒的に多く1日平均405冊（平成10年度）もの貸出があります。基礎研の貸出冊数は1日平均6冊（平成

10年度）雑誌の利用が中心の研究所図書室です。このように各図書室の性格を数字で表す、貸出冊数やその他の統計が、各端末ですぐにわかるというのもこのシステムの特徴のひとつです。

図書館が電子図書館としての機能を一層深め、一方きびしい人員削減が行われるなかで、おそらく百年前に京大図書館が誕生した当初からあったと思われる対面閲覧業務は、まさに消えゆく運命にあるのかもしれませんが。iLiswaveの閲覧システムでも自動貸出装置との連携がうたわれており、実際導入の動きが具体化している部局もあります。しかし、有人の閲覧カウンターが果たしている機能は、単なる機械に置き換えられる貸出・返却処理だけなのでしょう。電子化が高らかに叫ばれるなかで、利用者の小さなつぶやき声や生の表情を、微力ながらサービスに反映できる窓の存在はなおざりにされてはならないと思います。利用者の動向を感じしそれを業務に生かしていく、触角を備えた図書館システムこそこれから求められるのではないのでしょうか。

（かば あきこ：閲覧システムWG

基礎物理学研究所図書室）

新ILLシステムについて

児 玉 優 子

1. はじめに

探していた本や雑誌が図書館の本棚にないとき、または、OPACで検索しても見つからないとき、あなたはそこで諦めていませんか。学内にない資料でも、図書館を通じて他大学からコピーや貸出で入手することができます。これが、図書館間の「相互利用サービス」すなわち「ILL (Inter Library Loan)」です。

ILLには 複写申込、現物貸借申込、複写受付、現物貸借受付の4つの業務があり、具体的には所蔵館を調べたり、所蔵館に申し込んだり、他大学からの申し込みに対してコピー

を取って送ったり、料金をやり取りするなどの作業があります。現在は、学術情報センター（NACSIS）のNACSIS-ILLシステムを中心にオンラインで業務を行っています。

2. リプレースによる変化

昨年（1998年）1月から京都大学の図書館システムのリプレースが順次行われ、ILLワーキンググループで検討してきた新ILLシステムも、同年4月14日に本稼動しました。

このリプレースによって変化したことは、まず、ILLレコードを蓄積できるようになったことです。このことによって、どの雑誌の複写を

申し込む回数が多かったか集計できるようになり、購入雑誌見直しの参考データとして利用できるようになりました。また、手作業で書類作成したり、わざわざデータ入力していた会計処理も、蓄積したILLレコードを利用して短時間でできるようになりました。

さらに、NACSIS-ILLを介して図書館間でデータ（雑誌名やページ数など）のやり取りをするための作業画面を自由に設計できるようになりました。繰り返し使用するコマンドをボタンで用意し、コード参照ファイルによってコード確認の手間を省き、入力作業を簡素化することができました。

ほかに、他大学からの申し込みを受け付ける作業帳票にOPACのデータを取り込んだり、NACSIS-CATを利用してNACSIS-ILLには参加していない図書館への申込書を作成するなど、新しい試みもあります。

これらは、利用者の皆さんの目には直接見えない変化ですが、担当者の能率が上がり、図書館・室のサービス全体の向上につながることが期待されます。

3. ふりかえって

今回のリブレースで、京都大学は全国に先駆けて新しい通信プロトコルで学術情報センターに接続しました。まったく新しく作成したシステムだったので、果たしてうまく動いてくれるかどうか、不安な中で4月14日を迎えました。

通常、システムの切替時期はしばらくサービスを停止することが多いのですが、今回の切替は一夜のうちに終われ、一日もサービスを停止することなく完了できました。新システムも大

きなトラブルなしに動いてくれて、学内の利用者の皆さん、他大学から申込みされる皆さんにご迷惑をおかけすることなしに新しいスタートを切れたことを、ILLワーキンググループのメンバー一同喜び合いました。開発者、京大のスケジュールに合わせて準備を進めていただいた学術情報センター、附属図書館および各部局図書館・室のILL担当者の皆さんのご協力に感謝します。

個人的には、ユーザとしてシステム開発に参加させていただいたのは初めての経験でした。日常業務も行いながら要望を出したり動作確認をしていくのは大変でしたが、自分の提案したアイデアが実現していくのは楽しいことでもありました。以前のシステムが不自由だった分、こうしたら便利なのではないか、という要望をたくさん出せました。まだNACSIS-ILLを利用していない図書館・室の方々にも、ぜひこの新システムの便利さを味わっていただきたいと思っています。

4. 今後

新ILLシステムによって学内ILLのデータ処理も可能になりましたが、学内ILLについては制度自体を見直す時期に来ているかもしれません。

なお、ILLシステムの開発は今も続いています。現在は、図書館まで足を運んで申込書を書いていただかなくても、インターネット上で申し込めるシステムを開発中です。近いうちに「ドキュメントオーダーシステム」としてご紹介できることと思います。

（こだま ゆうこ：相互利用システムWG

医学図書館閲覧掛）

京都大学電子図書館の現在

後 藤 慶 太

1. 概要

本学電子図書館は、平成10（1998）年1月6日に稼働し、同年3月2日の披露式をもって本

格運用を開始した。「机の上に京都大学」をキャッチフレーズに、ここにアクセスすれば居ながらにして本学の森羅万象がわかるシステムを